

脳障害の発生にかかわる低体重出生と 双胎の役割りに関する研究

国立武蔵療養所小児神経科 有 馬 正 高
河 野 義 恭
東京小児療育病院 長 谷 部 孝 子
松 井 瑠 璃
齊 藤 陽 子

〔目 的〕

脳性麻痺（CP と略）における低体重児の占める意義の年度別変化、および双胎による脳障害の特徴を明らかにすることを目的とした。

〔方法および対象〕

1) 障害児特に肢体不自由児を専門とする2病院に入院または通園した CP のうち、生後の障害に起因するものを除き、在胎週数と出生時の体重を記録した。年度毎に体重分布を作製した、対照として、昭和38年以前に出生した CP で東大小児科に受診したものの分布を選んだ。

2) 双生児の少なくとも一人が脳障害で来院した患者に、アミノ酸分析、生化学的分析などを加えて基礎疾患を検討し、既知の遺伝性疾患を除外し得た例について

CT の記録を集計した。13組 15 例の CT 像について、嚢胞の有無とひろがり、脳表の萎縮像または脳室拡大の程度、奇形所見について検討した。

〔成 績〕

1) 2,500 gm 以下の低出生時体重の全体に占める比率は昭和50年まで30~35%であり、昭和51年以降は47%と増加した。体重別にみて、1,500 gm 以下の占める比率が近年になるにつれて増加し、遂に 2,001~2,500 gm の軽微な低体重児が減少し、昭和51年以後は 1,501~2,000 gm の群の方が高率となった。

2) CT の特徴

13組中4組は相手が死亡、6組は正常、3組は同胞ともに脳障害があった。相手の死亡した4例は全て頭囲が

表 1 全脳性麻痺に対する低出生体重児の比率 (%)

| | ~1,500 | 1,501~2,000 | 2,001~2,500 | 2,501~ | 総 数 (例) |
|---------|--------|-------------|-------------|--------|---------|
| 昭和33年以前 | 7.8 | | 25.8 | 66.4 | 387 |
| 34~38 | 4.5 | 8.5 | 21.8 | 65.2 | 733 |
| 39~45 | 9.9 | 11.0 | 11.0 | 68.1 | 91 |
| 46~50 | 8.1 | 10.3 | 15.2 | 66.4 | 223 |
| 51~55 | 11.0 | 20.3 | 15.6 | 53.1 | 64 |

表 2 双生児脳障害の CT 像

| 条 件 | 組 数 | 記録例数 | C T 像 | | | | |
|--------------|-----|------|-------|-------|-----|------|-----|
| | | | 広汎嚢胞 | 散在性嚢胞 | 孔 脳 | 部分萎縮 | 正 常 |
| 1人生存 CP・他方死亡 | 4 | 4 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 1人生存 CP・他方正常 | 6 | 6 | 1 | 1 | 1 | 3 | 0 |
| 2人とも脳障害 | 3 | 5 | 0 | 0 | 0 | 2 | 3 |

-5SD を割り高度の脳萎縮であった。病変は白質内に広汎な低吸収部分があり軟化病巣と考えられた。相手が正常のうち、上記と同様なのは1例、他は限局性嚢胞および孔脳症がみられたが、残り3例は嚢胞はなかった。3組の同胞罹患例の5例のCTでは精神遅滞同胞1組2例が正常、1例が透明中隔嚢胞などで萎縮像をみなかった。

〔考察および結論〕

CP において低体重児の占める比率は減少せず、特に高度の低体重児の比率が漸増している。一般人口中の

CP の減少の一因として 2,001~2,500 gm の軽度低体重群の減少が役割りを果していると考えられる。

双生児は脳障害の原因として無視できないが、その重篤さを CT でみた場合、他方が死亡した場合がもっとも障害の範囲が大で軟化病巣と萎縮が著明であった。しかし、軟化病巣は他方が正常の場合にも存在した。同胞ともに罹患した生存例の場合は脳病変はむしろ軽く、遺伝的なものも可能性があろう。以上、双胎にともなう CP の機序は異種性であろうと考えられた。

多胎児，とくに双生児への養育態度をめぐって

国立精神衛生研究所 池田由子
成田年重
中川幸

〔はじめに〕

現在双胎の出生頻度は分娩1,000につき約6.4といわれている。三胎に至っては分娩18,000につき1.0程度といわれている。わが国の双胎の出生率は遺伝学者によると、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカなどにくらべてはるかに低く、また、一卵生双生児の割合が外国より高いといわれている。いづれにせよ多胎が稀であればある程、よい意味にも悪い意味にも、特別視されることは言うまでもない。とりわけ受胎や出産の機制が未知の闇深く沈んでいる古代や、未開社会では、多胎は超自然と関係づけられ神聖視され、あるいは魔力をもつ不吉な存在として排斥されてきた。戦後の社会や家族制度の著しい変化と共に、わが国の多胎児をめぐる養育態度も変化してきたが、私たちの観察から得た多胎児を持つ母親への指導につき触れてみたいと思う。

〔わが国の多胎児をめぐる態度について〕

わが国では多胎に関する迷信、俗信、偏見があり、現在は減少しつつあるものの、いまだに潜在している。それは五つ子の父親山下氏の手記にも記載されている程である。

多胎に対する迷信、俗信の調査は、第二次大戦後文部省が行なっているが、双生児の出生は「風俗、習慣に反

した不適切な、あるいは不自然な行為をした報い、あるいは親の罪業が子孫に報いる因果応報と解釈されている。

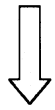
わが国では古代には三つ子が生まれると、稲や食糧が帝より下賜されたという記録が残っていることからみると、多胎は豊かな収穫と結びつけられて祝福されたこともあるようだが、その後封建制度の長子相続を混乱させるという社会的理由や、養育が困難、食べる口がふえるという経済的理由、更に宗教的な因果応報という考え方の影響もあり、忌避、排斥の方向に進んでいる。

私たちが保健所と協力して調査した、千葉県野田市27組、市川市25組の乳児双生児の家族との面接の結果を見ると、妊娠中や出産時に双胎とわかった時の母親の感情は、がっかりした、憂うつになったなど、不快を示したものが36名、60%を占めている。

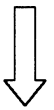
不快の理由は表1のごとくであるが、その中には、偏見があるという理由を挙げた24名が含まれている。

双生児に社会が偏見を持つと述べたものの中には、大別して双生児に関する迷信や俗信があるとしたもの、社会的評価が低いとしたものがある。それらは表2に示してある。

これらの迷信や気兼ねと、その家の職業、母親の学歴、



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔目的〕

脳性麻痺(CP と略)における低体重児の占める意義の年度別変化,および双胎による脳障害の特徴を明らかにすることを目的とした。